

コスモス

第4次 **27** 1979年12月

作品

西	杉夫	8
宮田	正平	9
野口	清子	10
寺島	珠雄	11
和田	英子	12
小宮	隆弘	13
向井	孝	14
高島	洋	15
近藤	計三	16
伊藤	正斉	17
長谷川	七郎	18
緒方	宗平	19
菅沼	瞭子	20
村松	武司	21
梅田	智江	22
申	有人	29
暮尾	淳	31
直方	十郎	32
押切	順三	33

コスモス雑記

「中野重治記念」号の読後感

前号作品評

詩をなぜ？書く
はなしの自由席

川口	黒川	吉田	長谷川七郎	村松
洋	洋	欣一	武司	
2	34	30	28	27
				22



白馬乗鞍山麓小谷高原

ロッヂ

かいてら

399-94長野県北安曇郡小谷村大字千国

phone 02618-2-2755

本社=104東京都中央区京橋2-7-7

phone 03-561-3143

定価 五〇〇円

近ごろ気になること

河合俊郎

六月に小さい詩集『朝鮮半島』を出した。この本は、韓国で百姓をしながら朴政権に忠誠を誓う、かつての教え子金貞子に贈りたく、でき次第航空便で送った。本より米の飯が食べたいといっていた彼女からは今だに何の便りもない。本を作ってくれた寺島さんから、韓国へは送らないほうがいい、日本の自民党政府より、朴政府のほうが詩人を重く見ているから、先方に迷惑がかかりそうだ、という手紙をもらった。吉田君(幻野の)からも電話で、相手が気の毒な立場になるといけないから送るな、といってきたが、これらは送ってしまったてから後のことであつた。

七月が過ぎ、八月が過ぎても金貞子から届いたという便りはなかった。こちらから問い合わせの手紙を出そうとも思ったが、没収された確認になるだろうと思つてやめた。

八月のある日、村はずれ(和地)の別荘に帰っていた中根千枝さん(社会人類学)にこのことを話したら、中央公論でさえ届かない時があるから没収だろう、明日ソウルに行くから、投函するばかりにして持つていらつしやい、友人もいるから必ず届けてあげる、といつてくれたので持参したら、快く持つて行つてくれた。しかし、これも音信不通、今だに何の連絡もない。

朝日新聞で、「このように個人的な感情の切実さが、歴史的、社会的現実と緊密に結びついている詩集は、この頃ではあまり例がないように思う」(北川透)という批評文を読んだり、岩礁という雑誌で、「かつての朝鮮の教え子を通しての、平和と反戦の詩である」(大井)という文を読んだりする

と、あるいは届かないほうがよかったではないかとも思う。

もし届いていたら、日本語の辞典を引きながら読んで、かつて、欲しがりません勝つまでは、を教えた旧師の思想の矛盾にあきれて、何と手紙に書いていいか迷つていのかもしれない。

戦争中に教職にあつた世代のひとりであつた私には、国家権力や軍国主義に対して、断乎たる厳しい批判行動のとれなかつた悔みがある。心の傷は深く痛い。それだけに今も権力をかさにきるもの、裏切るものへの不信と憎しみは強い。金貞子という個人ではなく、彼女に代表される朝鮮人とかかわりあひの歴史と現在の日韓問題を、政治的な脈絡でなしに、個人的な筋道を通してつかまえたかつたのである。国境を越え、歳月の距りを越えて、人間性の回復を、私自身に戻したかつたためである。こう考えてくると、今になってあの本が届くのが届くまいが、どちらでもいいように思う。それでも気になつてならないのはどうわ

川へ向う道

和田英子

けだろ。 (一九七九・一〇・八)

道を曲がると、急にキンモクセイの匂いがたふよう。川に向つて少し下り気味の二百米余りの道は十年來通つていたので、立ち並ぶ家々に住む人のようすが自然にわかることが多くなつた。

古い二軒つづきの平屋に住む小柄な老人は、夏の朝晩下帯一枚のはだし姿で盆栽と言いかねる植木類にホースの水をふきつけているが、ときには真白の三つ揃え、懐中時計をのぞかせて、迎えの新車にそり返つておさまっていることがある。と思えば、パジャマ姿で駅前立っている。うわさでは、造っている養毛剤を理髪店に卸して大もうけをし、町でも上位の高額所得者であるらしい。

キンモクセイの匂う道を今日は黒いベレー帽、紺に白の縞の細身の三つ揃え、相変らず懐中時計のく

さりをのぞかせステッキをついて歩く。向いのアパートに住んでいた息子一家は新築の大きな家に移つたようだが、余程気に入つてゐるのか、動く気配はない。が、ある日、植木類がとつと払われ、無人の家になることも予想出来ぬことはない。

川へ下るあたりは、ドブクロを密造したというバラックが整理されて、十年程前に二階建てのこじんまりした家が建つた。前を通るときいつも家の前で、スズメにパン屑を与えるおだやかな老人がいた。玄関を箒ではいていることもあつた。あるとき、向いの溝を掃除してゐる老女に丁寧な言葉遣いで話しかけて、ぞんざいな返事を受けてゐるのを見て、あ、と思つた。改めて表札を眺めると、家族欄のある表札は、一人の名前だけ書かれていた。一人ぐらしだから向いの老女は軽くみていたに相違ない。スズメのパン屑のこともキザだと思つたことを悔いた。

が、寒い頃から姿を全然見なくなった。隣家は毎朝白い洗濯物が

繰る活気のある家である。日が暮れて通るとき、時折見上げたがいつも門灯と窓には灯りがともつていた。そのせまい庭に桜の花が咲いたとき、忌中のはり紙が出ていた。身寄りの少ない人らしく、その後も人の気配は感じられず、門灯は相変らずともつていた。

キンモクセイの匂う今日、この家の階下の座敷はガレージに様変わりし塀はとり払われて横に収まる広い扉が真新しい。隣家が買い取つたらしく境目のブロックは除かれて、色の違う雨傘が四本明るくひらかれて干されている。

門灯も老人の世話も働きのもの隣家の奥さんの仕事の一つであつたのだらう。

現代文明のそばつちり

高島 洋

先日、勤務先の食休時間を利用して近くの歯科医院に行った。治療をうけながら待合室からの話し声がそのまま聞えてくる。この町

の古老らしく、このままゆけば米作りの技能をもっている者がいなくなる、米作りが将来は絶えてしまふのではなからうかといった話である。このあたりはN電鉄が開発して住宅街をつくつてゐるが、まだまだ田畑が残つていて、N電鉄に土地を売つた者と売らなかつた者の対立がこの町のなかにあるという。

ところで若者達が田畑をすてて工場に通うようになったのは、池田内閣の工業立国的産業政策と所得倍増を言い出して以来のことである。いわゆる産業の近代化を進めはじめてからであらう。その後幾多の公害を流したあげく、その極に達しているのが原子力発電である。先日大阪で原発反対、電気料金不払連合の集会があつて、電気のない生活へというテーマで講師の話があつた。話を聞くにつれて自分自身がとつぷりとその近代化とやらのぬるま湯につかっていることを知らされた。電気の使用はもとより区画整理の名目で産業道路の拡張による耕作面積

を狭め、下水処理場の汚泥はリンやチツソを多分に含んで肥料にならないといった具合にある。要はあらゆる公害のない生活にもどさなければならぬ。そのことが原発を必要にすることに繋がるとおもふ。そのためには産業の規模を押えることが必要だ。それを人々はおそれるが、何んと言つても原発労働者の生命にかかわることだし、日本の原発の原動力であるウラン燃料の産地、南アメリカの黒人労働者の生命にかかわることなのだから。

神戸異人館街と小野年譜

寺島珠雄

神戸、北野町から山本通へかけての、いわゆる異人館の多い一帯は近年有名になりすぎたが、私が知つたころは静かだった。

といつても、さして昔に知つたわけではなく、二十年かもう少し前かである。異人館の集まつている(かの風

見鶏の煉瓦建てでもある（北野町の一つの目じるしは三本松の不動さんで、そこから細い急坂を登ったあたりから西が異人館街、ということになる。不動さんのわきは小さな十字路である。私はその十字路を異人館街とは逆に、しかし、やはり急勾配でずうっと下った加納町交叉点近くにいた。そこがはじめて行った神戸ではじめての落ちつき先だった。

珍らしくて毎日よく歩いた。坂を登って行くと不動さんと十字路を中にして東側にヒッチコックというプレートの出ている門があったりした。但、映画監督ヒッチコックが日本に設けた別邸ではない。それならAであろうが、そのヒッチコック氏のプレートはJだかGだかを頭に書かれていた。

もつと登って、さらに石段を数十段登ると北野天神境内、石段を敬遠して西へ進めば風見鶏の館前から山本通へ出て諏訪山に通じる。そんな歩き方をやみくもにしていたときの発見に、古い普通の民家の、もう非常に読みづらい墨書

きの表札に、何十何番屋敷と書いてあって、それが新鮮だった。一つ二つではなく随分それを見た。

東京にもあったのかも知れないが私には未見で、欧米では一軒の家に一つの番号だから、日本のような同番地にくつもの家が包括されているのと違って探しやすいと聞いていた（ような）そんなことは、ここでも行われていたではないかと思つた。初期開港地ゆえに欧米ふうがまず取り入れられたのかとも思つた。

それから十数年してこんどは大阪で、小野十三郎さんの年譜編成にとりかかってみると、一九〇三（明治36）年生れの小野さんの古い戸籍には、やはり何十何番屋敷の呼称が用いられている。神戸に限ったことではないのである。

してみると全国的に、屋敷番号を用いた時期があり、それが番地制に移行したのか。知ってる人はとうに知ってるであろうことを私は考える。しかし軽く考えてみたりする程度できつちり詰めて行きはしない。ただ、心覚えの異人館

街の路地小路は最近に歩いてみた。古い読みづらい墨書き表札を掲げた家は一軒もなかった。（10・10）

雑記

梅田智江

24号の「詩をなぜ書く」で西さんが「作者と現実のあいだに一線をひいて、その一方側である作者が、ただ眼をこらして描いていくのでは、現実はその全貌をあらわさないだろう」と書き、25号では近藤さんが「小野が（コスモスの作品が）トリビアルなものにこだわりすぎ」というふう指摘するとき、その大きな欠陥は観賞者、傍観者の視点にとどまっているイメージを指しているのではなからうか」と書いている。この意見は私とずれる。そのことを少し書いてみたい。

その前に自分に「詩で何が書きたいか」と問うてみると、「人間」が書きたいからだと思う。もう少しつつこんで言うと「ニンゲンの

偉大と卑小の二重性」に興味がある。勿論のことだが、ジブンをニンゲンであるが、ジブンのことを書くことによって、ニンゲンを描くという私小説な方法は、興味が無い。

私はただ矛盾に満ちたニンゲンを、あるがままに直視したい。焦点は、ごく卑近な、そこらへんで生きているヒト達のトリビアルな日常生活。ごくフツウに生きているヒト達の心にかくされている卑小なもの。不気味な暗黒面——いいかえれば、自分でも気づかない、きづいていても眼をつぶり、口をつぐんでしまいたい異様な何か——心理——残酷さ。

これがむつかしい。ジブンを知らなければ、タニンのことだってわからない。やさしくなければイジワルにもならない。（そうだ。私はイジワルイ詩が書きたいのだ。残酷さにきづかなければヒトなんて愛せない。モノゴトの真実や本質なんて、あるようでもあるし、ないようでもあるのだ。

そして私は、ピントをあわせる

場合、主義主張をもちたくない。事あらば、傍観者でいたい。いや、私の大きな長所は傍観者の視点を徹底的に持ちつづけることにおき

たい。

告発の姿勢を私は持ちたくない。そして、作者と現実との間に、一線をひいて、ひたすら眼をこらすことによって、現実の全貌をあらわしたい。現実のまっ只中に、生きていくからこそ、そこから、のがれられないからこそ。

どうして現実のめりこんで、主義主張を持ち、告発の姿勢で、現実がとらえられるのだろうか？ 近藤氏のいわゆる「現実」に生活する人間の「実在感」は、醒めた眼でしか語れない。

ただ、ただ、私は、ひたすら明澄な眼を持ちたいのみだ。その先に、私は、どす黒い哄笑を夢みているのだが……。

——と、ここまで書いてきて、何だかバヤイ気がするなあ。こんなこと、クソマジメに書いて。私の資質はマジメ人間なんだ。私の書いてきた詩なんて、やっ

ぱり、やっぱり、お涙チヨウダイだア……と思つたりして。

中野重治を偲ぶ会

近藤計三

大阪での「中野重治を偲ぶ会」が（10月7日に大阪文学学校の教室）は、発起人代表は小野十三郎で、他には藤沢恒夫、谷沢永一、小島輝正の諸氏、世話人代表者の中川隆永で、何人かがその手足になつて、急遽に準備がすすめられた。

気にかかった、ただ一つのこと、10月7日が衆議院議員選挙の投票日でもあり、また中野重治の死がどこまで若い世代の人々の関心をひきよせられるか、ということにつきるものであった。

まして、会の当日は雨にたたられ、投票率の低調さなどはどうでもいいが、さて偲ぶ会の方の出足はどうなるか、という想いは、どこかで、やはりちよつと不安にあったというのが本音でもある。

ここしばらく、大阪では、こうした規模の文芸講演会など、あまりなかったし、またやろうという気運もそうまとまってこない状況だけに、皆目の見当もつかなかった。

しかし、開催定刻まぢかになると、雨をひいて、文学関係者はもとより、政治関係者も含め、顔なじみ、初めてお目にかかる年配者も続々とやってきてくれた。

結局は、当日の参加者百二十数名となり、午後一時から、小野十三郎による中野重治の想い出、元新協劇団の俳優であった高橋正夫の詩朗読、谷沢永一の二時間ちかくにわたる戦前、戦中、戦後にかけての具体的な作品に即しての変貌の肯定と否定を分析した中野重治論、次いで小島輝正、浅野孟府、松本広次、高田敏造、金時鐘、直原弘道、小野義彦など、それぞれに自分と中野の関わりといった発言が続き、五時の閉会きつかりまで、まさに中野重治追悼の厚意あふれる、なごやかな時間がたつていった。とくに、小野十三郎は、

この間に、みずから二度、三度にわたって飛び入り発言をするというありさまですらあった。また、参加者のなかには、発言したい人もあったろうし、そうすれば聴衆のぼくらのあらたな発見もあったかも知れないが、いかんせんかな、時間がたりなかったのがくやまれる。ただ、毎年、こうした中野重治を偲ぶ会をもとうと須藤和光が閉会で提案し、支持されたから、いづれいんな機会もあるう。

こういう会風景をながめていると、中野重治という人間像が、いかに大阪でもつよく結びついているかと、改めてよくには考え直される。

にも拘らず、ぼくの残念といえ、若い世代の参加がいますこし、という想いもあるが、なによりも「コスモス」の（中野重治記念）号が、会当日までに届かなかつたことであつた。日曜日の無配達ということもあったのだろうが、なんとも無念でもあった。

郡山吉江さんのこと

野口清子

「しくらめん はなやかなればたのしけれ はじめなりとも おわりなりとも」

私、相変わらず、毎日をおちついてすごしています。もう少し長い時を筆をもつ事が出来ればと念じております。陽の光りがとてもあたたかく、空ばかり見えています。」

今年初めての便りで、「はじめなりともおわりなりとも」の歌を心にしめる想いで読んだ。

郡山さんが癌の手術で入院されたのは昨年の春で、入院直前まで三里塚の野戦病院で働いていた。

此の事を知ったのは、朝鮮で活動した日本の詩人について書き続けてきた任展慧さんから、朝鮮で詩作活動していた郡山さんの夫君博氏の事を知りたいので紹介してという手紙を貰っていたので、郡山さんから、夫君郡山博氏の未発表作品が沢山あり、詩集にまとめ

ておきたいというはなしもきいていたのを思い出して、早速電話したら、「明日入院する、今日は静にやすみたい」と言われ、驚いた。退院されてから伺った時、暑い夏の日盛り、郡山さんはひとりベッドにねていた。

直腸癌で手術をしたが、未だ癌になるかも知れない小さいのがあって、と言われたが、彼女も身のまわりも美しくかたずいていた。始めは党の方針で日やとい労働者になり、それから博氏の死後もずっと同じ職場で続けてこられ、救済会の仕事の中心になって働き、三里塚闘争では野戦病院で全力をつくした。

また、ペンをとって当面する諸問題に就いて書き続け、「新地平」に自己史も連載されていたが、それらの原稿がなかなか書きすすめられないことをなげかれた。

その後、気になりながら御無沙汰していたが、先日、丸山友岐子さんの出版記念会で思いがけなくお会いした。

やせて力ない感じながら、相変

らず美しく、三里塚にも人に助けられながら、行っているという。プロレタリア詩人郡山博氏の詩集もエッセイもまとめられないかも知れないが、過去よりも現在未来に向って余力をあげて生きぬいておられる郡山吉江さんをすばらしい人だと思う。

最近の「救援」を開いたら、郡山さんが、救援活動の充実と拡大を訴える力のこもった文章を書いている。そして現在、三里塚野戦病院の記録を残すために、自ら一日何枚かのノルマを課していると言われていた。

(一九七九・十・十三)

中野さんのこと、すこし

緒方宗平

25号の「後記」によると中野重治の通夜にコスモスから吉田、内田、松永さんたちがでかけていったという。中野重治の死を知ったとき内田さんは上京するだろうとおもった、はたしてそうだった。

一面識もないし文通もなかった私にはわざわざかけて行くことはなかったが心の中ではやはり行きたいとおもっていた。生前に一度ぐらいお目にかかりたいとおもっていたが身のほどしらずだろう。残念である。で、その席でか、かえりの道すがらか、かえってからか、とにかく中野重治のはなしがでたとおもう。コスモスにそのことを誰か書いて欲しい。誰れも書かないということは考えられない。

中野重治は五十才になったら詩を書く、すこしはましなものが書けるだろうと、五十になるずっとまえに書いたことがある。五十になっても七十になってもしかし詩を書かなかった。そしてそのことは彼自身の方都合によるのか、それとも詩の方にあるのか、秋山さんにしても、内田さんにしても七十になっても詩を書いているではないか、とすると詩の方にあるうともおもえないが。

田木繁もぼつり詩を書かなかった。中野が書かなかったのと田木が書かなかったのと本質的

なものはおなじであるかどうか。中野重治はもう一度ということなしに亡くなった。

「アジア幻視行」のことなど

伊藤正斉

山や川や
風のそよぎを
身につけて生きてゆく

宗教にささえられた 精神の豊穡を

それに比例するような
人々のくらしの貧しさ

文明社会の
人間荒廃の巷からのがれて
人間らしい静安を

この国の人びとのくらしのなか
に見出そうとする 人びと
その人びとに
そのことを語る資格があるか

荒廃した文明社会からやってき
て

中世の闇と静けさのなかに
心を遊ばせようとするのは
身のほど知らぬ旅人の
ごうまん遊びかも知れない

これは木原実から贈られた(「アジア幻視行」という本の中の「ヒマラヤの微風の下で」のなかからぬき書きした言葉である。衆議院が派遣した東南アジア調査団として、旅をした木原の旅行記である。入院中私はこの本を愛読した。退院してからもしばらく熱発がつづいた。九月三十日、十六号台風が東海地を直撃するというラジオの声をききながら、寝てもいられないので、外へ出て葦屋根を心配したり、雨戸を釘づけしたりした。台風はたいしたことはなかったが、朝の三時まで寝られなかった。台風がすぎて秋晴のいい天気になり、嘘のように熱がさがったのがうれしかった。

十月七日は衆議院議員選挙の日である。この日は冷たい雨が降っていた。また少し熱が出ていた。

十二時ごろには、議員の当選者の大勢がぼちぼちわかりはじめていた。木原実も苦戦していた。心配になってぬぐれなかった。八日の午前二時にやっと木原実が当選確定になったことが知らされて、眠った。

雨が晴れたので郵便局へ出かけ
て木原に電報を送った。

夕焼と山茶花

秋山 清

の夕焼を見たいなと思った。

もう一つ、今年は山茶花がたくさん花をつけている。これが全国的な現象か、東京近辺だけのものか知らぬが、山茶花の、白から赤までの花の色もとどろで、しかしそのどれもしくなたはずまい、濃つとする朝夕の気温にふさわしく、いつもの年にもましてひっそりした気配である。今年はイチヨウ、プラタナス、アメリカカエデなどの並木の葉が、いつまでも青くて黄色化せず、奇妙なことだと見ていたが、その不足を肩代りするように、いつもの年の倍も三倍も、山茶花がこんなに花をつけるのか、と見れば見るほどその思いが深い。夫婦揃って猫ばかり可愛がっている清水夫妻や名古屋の岡田家などは、こんな家の外の、季節にしたがいながら、その季節のささやかな相違のなかで、そつと自我を主張しているのかとも見える。これらの木や花のことなどに気がついていくかしら、とふと思った。(一九七九、一一、五)

西の高層ビル群などのバックにあ

裏から登る

西 杉 夫

山かけの材木屋のわきから
小道が始まっている、
トレパンの男がゆったりしたかけ足で登っていく。
名物の桜はおわって
青葉いちめん、
走りつづけるこぶとり中年、
日々の健康のために。
下に町並みが見えてくる
まんまんの川、
まっすぐの平和大通り。
首のあたり汗がしたたっている、
スピードはゆるめない。
木立のむこうの建物が
あれがABCか。
山頂の広場で男はとまる。
陽光に白砂がまぶしく

夏につつこむ広島の
ぼっと開けたしずかさだ。
爆心地から2キロ、比治山、
とびきりの平和都市、
足もとをするすると新幹線がのびていく。
ことしも儀式、
8月6日午前8時から40分、
8時15分から黙とう1分、
サイレンと寺院の鐘、
放鳩1500羽。
男は時計を見てたちあがる、
生きのこった《即位大典記念》の柱を曲って、
いまきた道をこんどは下る、
慣れた足どりだ。
左官町、猫屋町、紙屋町、研屋町、
鉄砲町、雑魚場町――
吹きとび、押しつぶされ、焼けただれ、
それをぎつしりうめたビルが
一瞬みどりに消える、
トレパンはだまって走る、
足音だけがつついている。

禅尼洒脱

宮 田 正 平

七十に近い男をつかまえて
この子 わしが生んだようなもんじや
富士山を枕に寝るといっておばあちゃんは
“この子”のひと回り上

ほうか おまえ
お母はんを知らんのか
乳はもろてないのか
三ツまでもろたか
よかった よかった
おまえの体にお母はんが生きてござる
三ツから一人でよう大きいなつた
可哀そうにのう
と 不自由な目に
芥子粒ほどの涙がひとつ
キラリ ポロリ

また雨になりそうや もう去ね
今度は嫁さん連れて来い
泊って行くんじや ええな
（おまえらの夜のしごとの邪魔はせん）
きつとだぞ 約束したぞ
ほれ 指切拳万じや
白魚のような小指が
節くれたぼくの指に絡まった
きようはよかった よう来てくれた
小さな体をまるごと声にして
呵々大笑した

本降りにならんうちに 早よいね
寺の石段は苔で滑るで
氣いつけて行け
おまえ 足が三ツあろうが
こけんように 三本足で歩け
（意味がわかるか）
そこでまた
腹をゆすって笑いとばした
ぼくは 二本の足で
山を降りた

手紙

野口清子

花のことばかり書いてしまふ
垣根の金木犀が匂い
コスモスがそよぎ
鶏頭が大きな赤い玉をむすんでいると
むく鳥が柿の実をついばみ
野良猫が日溜りであくびする

灰色のコンクリートの
独房で

死刑を求刑されている小野さんが
雀と語り

とんぼや柿の画をかき
私は無実の人間ですから
最後の最後までたたかって
真実を明らかにします

と書いてくる

何を書いても まにあわないような
黒い風が吹いてきて
私の心をせきたてる

でつちあげ

羽をもがれ
足をむしりとられ
ころがされている

閉ざされたやみのなかで
線香をいぶす
ろうそくの火をふきつける

やつら
むきだしの牙で吠える
殺った筈だと
この道を歩いたと

浅い夜のうた

寺島珠雄

イジヨウチヨウイ

ということをラジオはしゃべっている。
異常潮位、なのだ。

読んでいる本はおもしろいが
気分には頭痛的な部分がある。

その本には

小学一年生一学期の通信簿をもらって

「唱歌、乙にすんなら、もう学校に行かん」
と先生に「談判」したことが書いてある。

明治大正、境目ごろのその話は

最初の通信簿おれも唱歌は乙だったと思ひ出させる。

それは二十年余りあとで

談判はしなかったから

おれの乙は三学期まで並んだ。

そして二年生になると

同じ女先生だが乙は消えた。

先生の家は川のそばにあり

村人は食器も野菜も衣類も川で洗った。

本棚に空色表紙の小型本が並んでいて

「シエイクスピア」全集というのが
一字ずつは読めるけど言えなかった。

いっしょに遊びに行った油屋の倅、瀬戸物屋の倅、足袋

屋の娘、時計屋の娘――

みんな言えなかった。

大人になってからも

おれはあの家へ何度か行つた。

しかし、もう先生はいないだろう――

思い出す思い出す顔顔のなかに

いつか本の著者もまじっている

長いものがたり歌をうたう顔である。

「談判」の自信に磨きのかかった顔である。

嗚呼はわかつてるが嗟々もあつたかと

感情の文字をさぐる。

ラジオはまだ異常潮位で

港々の名をあげては何十何センチ高いとしゃべっている。

頭痛的はそのせいかとこじつけてみる。

顔顔を肴に一杯やるかと無声独語する。

からだはまるで動かない。

夜は更けきらぬ。

車内から

和田英子

色づいたアキノキリン草も
カヤツリ草も
黒い影になった
地にしゃがむオシロイ花が
点々とかすり模様横にとび
線路づたいの小さな工場の
洗面所に並んだ蛇口の前で
ひとりの男がゆっくり顔を拭いている
昨日より少し濃くなった闇
ホウキ草 低い柳
蛇行する勤め帰りの車内は
灯りに集う蛇のように
会話は絶えまない
今朝 門の前で
難聴訴訟の
消えた音をかせせと
ビラを配る節立った手は

根曲り竹であつたが
応対する二十八才担当社員の
昨夜 自らの生を枉げた
硬直した蒼い手は
何の木であるか
工場構内グリーンベルトの
楠の木から
穿たれた指は
遠く北に向い
ハマネスのむこうに
消える
駅近く
ポイントが切り換えられる
幾条にもひろがるレールに
屯ろする貨車
ワム ワム ワム ワム ワム ワラ ワラ
無人の操車掛室
時計台
低いシグナル
橙色の義眼が
こちらを狙っている

中秋

小宮隆弘

膝をくずして
スリッパひとつの横坐りに
はたげてたるんだ白い太股が
向い合うちゃぶ台の下にあった

たしかに そうだ
三十年ちかくも
からだのぬくもりをみとめあつてきた
おれの女房といえる女がそこにいる

赤旗をかついで板付基地をめぐる
十万人の輪の中の疲れた一人であつた女は
マイホーム奴隷に

決してなりたくないといつていた
きのうの言葉を反古にして
前かがみ
老眼鏡をずりあげ
定額預金の証書をにじるようにめくり
ぜにかねの勘定をしているのだ
いくすじか
しらがのまじった
洗い髪の
風呂あがりの肌をさらして

わずらわしく
またか という
衆議員選の個人演説会のよびこみ
勝手口の扉があく

中秋の月
女房の太股
湯ざめはないか